

学校が地域と手をたずさえて

新潟市大江山地区の教育運動の現状とこれから

高橋 武昌

□ 子どもをとらえなおす仕事の中から

「せつぶんの八時ごろ わたしが お母さんに、「ねえ、まめまきしよう。」というとき、「おおばらになるねっか。」といいました。そのとき、テレビで五つ子の赤ちゃんのばんぐみをみんなで見ました。……（しばらく五つ子のはなしがはずんで）……「あっ、わすれてた、まめまきしようよ。」と、またいうと、「しずかにしていれ。」といいました。わたしは「ねえ、しようよ。」といいました。するとお父さんが、「きょうしないことにしようぜ。」といいました。「ねえ、しないと、おにがくるよ。」というとき、「ばか、おになんて、こねえわや。」というので、「わかんないよ。」といってねました。」

節分の行事では、学校でそのいわれや、鬼の絵本のよみきかせ、節分大会などしました。とも子は、目をかがやかせて、その夜の家庭での行事をたのしみにして帰ってきたのですがとも子の家の親の関心は、テレビの五つ子の番組でした。子どもの生き生きとした心はしばらくでしまいました。親に、子どもと共に考え生きようとする姿勢が欠けていたようでした。親は、親なりにその日ぐらしに追われ、わずかのいいいのひときは、実利的で、便利となった「文化生活？」にのめりこんでしまっ

いたからではないでしょうか。

いつから、こんな大人たちがふえたのでしょうか。私たち、この大江山地区に住み、地域の学校に勤める教師たちは、子どもを本気でとらえなおしてみようと、いろいろな試みを始めました。

大人たちのこともそうですが、子ども達の状況もずい分と気になる姿が見えていました。

(1) 地域の状況と子どもの変化

私たちの地域は新潟市でも農耕地の残っているところです。あたりが、宅地にかわり、住宅もどんどんできています。農家も現金収入が多くなり、どこの家でも改築増築で大わらわです。その現象と同時に、父親は賃かせぎにいくことが多くなり、農業中心のテンボはくずれ賃金生活を余儀なくされつつあるわけです。同じように、母親の低賃金の工場への勤めが多くなっています。そこで、

① 動物などの飼育をしなくなった。

② 子どもの手伝い・家事労働がへってきた。

③ 生活が合理化され家の中で遊ぶと、ちらかす・よごすということだと思いきって何でもやれない。

④ 食事——とくに夕食をいっしょにすることがすくなくなった（いっしょに笑ったり話したりすることが少ないともいえる）

⑤ ワラ・竹などを利用した遊びをしなくなった。そのかわりに、電子ゲーム等、既成のものでの遊びが目立つ。

⑥ 服のよごれがうるさくいわれるようになった。

⑦ 学校から帰っておやつを自分で買う（とくに色素のついたものを）

⑧ 朝の生活のくずれが著しい。前日の就寝がおそく、朝がゆっくりで忙しい。排便などもきちんと出来ない。

⑨ テレビの視聴が長時間で体を使う子とそうでない子の差が大きくなってきた。

その他、子どもが手先がきかないというので、級の二人の家で、ボタンをやめて、全部ホックにつけなおしてもらってきている子がいます。もちろん、この子らは、ナイフで上手に作業することも、はしの持ち方も不得意です。五十音の字も形をなさず、手の不自由さが象徴的にあらわれています。先のとも子の日記にあるような家庭内における心の荒廃と同時に、子のしなやかさを著しく欠く子が現われているのも事実です。

丸山小学校では、様々な調査を学校から、親対象・子ども対象にやってきましたがその一例を次に示しておきます。

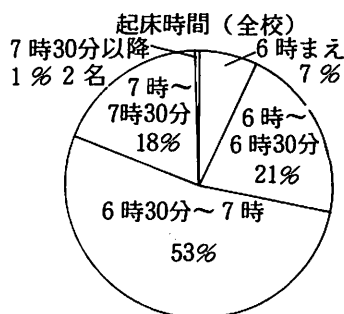
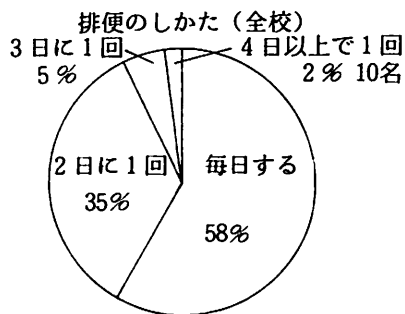
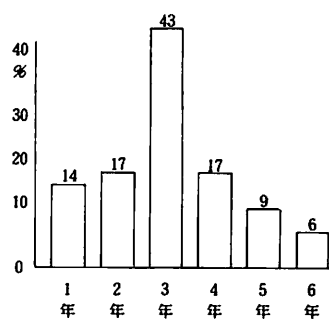
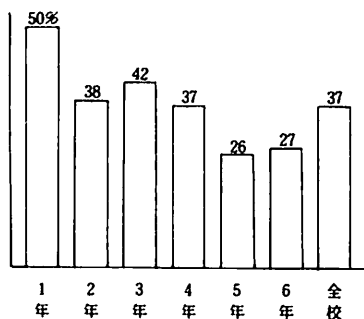
(2) 地域の変ほうとくらし

私たちの地域の子どもの心と体の荒廃を調べてくるとどうしても地域の生産・生活の問題につきあたります。まさに、都市近郊農業の展望が失なわれている状況や、高度経済成長による都市化の問題は、地域の課題にありながら、大きな政治状況の中で生じるものでもあります。

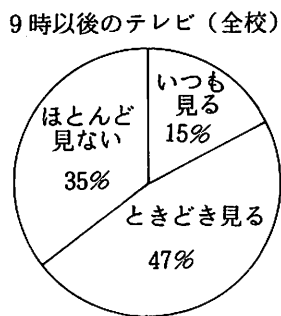
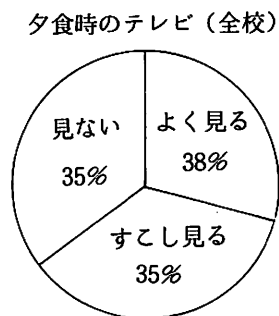
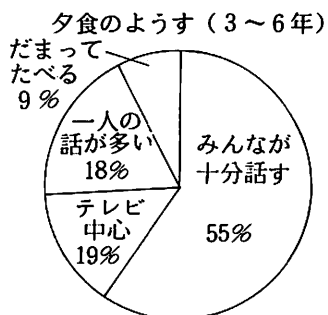
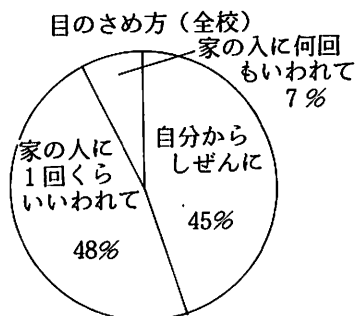
早おき型の子とおそおき型の子の生活の比較

	おそくおきる子% (7時すぎ)	はやくおきる子% (6時半まえ)
人にいわれないとおきられない	79%	25%
朝の手伝いをしない	54%	25%
朝、歯をみがく	48%	91%
きちんと朝食をとる	57%	94%
夜9時以後のテレビをみない	19%	28%
家での学習が1時間以上	8%	30%
10時すぎにねる	35%	2%
ふとんの中に入ってあっという間にねむれる	11%	38%
ねる前に歯をみがく	49%	54%
前日、学校の準備をする	68%	51%

けさの排便してこない子(調査日) テレビ視聴時間(4時間～4時間以上)



地域教育運動の現状とこれから



阿賀野川と信濃川にはさまれた湛水地帯ではかつての農民は胸まで泥につかって稲の生産にはげんできました。昭和三十年代、土地改良事業の完成により、日本の代表的穀倉地帯にかわったのは二十年前のことです。それもつかのま、昭和三十年代後半、新産都市に指定され裏日本の中核都市として、東工業港の新設、重化学工業の振興・上越新幹線や関越自動車道の建設がはじめられる中で、その大江山地区を含む亀田郷にも激的な生産と生活の変化をもたらしたのです。

まず、猛烈な人口増加と農家・非農家の混住が生じてきました。郷内の人口八万人（三十五年）から十八万人（五十三年）となり、大江山地区は八〇〇〇人前後の人口であり変化はないが様々な点で影響をうけはじめました。まず、混住化の下で、土地荒廃の傾向を示しはじめました。四十五年新産都市計画法による市街化区域と調整区域の線引きに際し、郷内では、一三五〇ha（三十五の郷内農地七八〇〇ha）、即ち農地面積の約二十％が市街化に編入されることになったのです。市街地に接近している農家が、土地を売り、代替地をこの郷内の農村部に求め、土地所有権が、次々とかわる「玉つき現象」があらわれはじめたのです。市街化地域の土地転用で一反三〇〇〇万円という農業生産の現状からあまりにもかけはなれたこの現実には、農民の価値観を大きくくわけてしまったのです。

大江山地区においても宮農意欲の低下となり農地売却による経営規模の縮小・兼業化がすすみました。農業年収三〇〇万円以上の専業農家は四十戸になってしまいました（全農家の六％）。二兼が一兼を大きくうわまっています。これらの影響は一次、二次減収を折目にしながら、家庭・地域荒廃を生みだし教育・文化の問題としてもあらわれてきているのです。

(3) 受験体制のはざま

又、受験体制の矛盾の中にみられる問題は様々な現象としても父母・子どもの中に陰をおとすと同じ時に、かつて中教審にみられる「期待される人間像……いい子像」の教育・しつけが重なりあい大変な状況をつくりあげてきました。

小学校一年生を何回も受けてきました。が年がすすむほど、一年生の教室におかしな姿があらわれはじめました。一年生の四月の授業参観にはまさにはなやいだ楽しい風景です。一年生は、授業が始まる頃、自分の親が入って来ると、くるりとうしろむき、親に手をふり「お母さん！」と小さい声だしてよびます。さてお母さんの方は、「あっ自分の子だ！」と気づくと、手をふりにこっとしてくれます。子どもは安心。なかには子どもと目があっても無視するお母さんもいます。一ばん大へんなのは、子どもと目があうと、急に、カーッとする親です。

うしろをむいて、あどけないサインを送っている子の姿をみて、「まえをむけ！」とどならんばかりのこわい顔でにらみつけるのです。子どもは、朝家を出る前は、お母さんに期待されがらんとおもっていたのに、その気持ちはいっぺんにふっとんでしまいます。

ついに子どもは一時間中、手あそびをしているしまつ。授業後のこんだん会で、以上の状況のはなしを私が切りだすと、お母さん方は大笑いしながら、「先生ね、ほんとはね子どもが、うしろをむいて手をふっているとき、カッとなったのは、何だかどうしてみようもないのです。先生、うちの子は四月に入学したばかりなのに、もう授業に集中できないのでしょうか。家の子は、こんな状態で、

高学年になったら完全におちこぼれますね。」というんです。一年生の大切な生き方育て方の話にく前に、おちこぼれを気にしなければならぬ親がふえているのが事実です。そして、家では「はやく」「しずかに」「勉強しろ」と号令をかけます。こんな詩を聞いた級の子がいます。

しゅくだい 二年男

せんせい

ぼくのおかあさんはね、

「ただいま。」

といつてかばんをおろすと

「しゅくだいねんか。」

といいます。

ぼくは

「ねえよ。」

といいます。

ぼくが、家てい学習をおわつたときまた

「しゅくだいねえんか。」

といいます。ぼくが、

「さっきゆつたろ。」

といいます。

おとうさんが、かえってきてごはんをたべているとき、また

「しゅくだいねんか。」

といいます。

「ねえてば なんだいったらわかる。」
といいます。

ごはんをたべおわったとき また

「しゅくだいねんか。」

というので

「ねえてば。」

とおこったかおでいます。

そして、テレビをみていたら またきゅうに

「しゅくだいねんか。」

ときくので、ぼくは、

「ねえてば。」

といいました。ねるとき

「おやすみなさい。」

といったら、また、

「しゅくだいねんか。」

といってやっとねられました。

この子は、寝るまでに、十七回も「勉強したか。」と両親にいわれ、育っています。いい子像は親の中にも徹底して来たのです。

(4) 学校の中で育つ部分

かって私は、正しい親を通してみた労働観を一年生の子どもと考えてみることにしました。一年生の三学期の社会科で「家族の人たちの仕事」について授業をすすめました。最後の方で「では、お父さんにどんなことをお願いしてみたいかあげてみましょう。」ということで、あげさせました。

ア お父さんから絵本をよんでもらいたい。

イ 夜はやく帰ってきてほしい。

ウ おとうさんはおかあさんにビールもってこいといいます。おかあさんは、こんどわたしにめいいします。わたしはいつもビールをもってくるかかります。こんどこうさん、じぶんでもってきてください。

エ ぼくのへやをつくってください。

オ たまには、ぼくとあそんでください。

カ　ぼくのへやのかべをとってください。

実は、「ぼくのへやのかべをとってください。」といったまさしの発言は、みんなの笑いをよびました。わたしは、まさしが、住んでいる家がありとうかびます。すばらしい家なのです。農家ですが、造りは立派です。姉さんと二人きょうだいで、家では仕事らしい仕事はなく、部屋はりっぱなのを一つずつ持っています。理由をきくと、「ぼくは、へやにひとりでねるのはさみしいから、ねえちゃんの部屋とのあいだのかべを、お父さんにとってほしい。」というわけです。姉さんとお母さんのいない夜、いっしょにねて、うたをうたったことがとても楽しかったというんです。だから境のかべがなければいいという発想は子どもらしくてかわいいのです。子どものよろこび、かなしみは、意外に身近かで日常的なものです。実は、こういうことを授業の中でとり上げ意識化し、子どもを刺激する時、子どもの本来発達させられるべき正しい感情と授業内容が統一されていくのではないか、思ったのです。

「では、まさしくんが、うちでさみしくないようになるには、どうしたらいいかな。」と切りだすと次々と発言がありました。

ア　ぼくはまさしくんの家にとまりにいてやる

イ　おじいちゃんといっしょにねたらどうですか

ウ　うちの人といっしょに手伝いをする

エ　夜は、おとうさんたちのへやにいたらどうですか

オ　あかちゃんを生んでもらったらどうですか

ア・イ・エについては、むりらしいということになりました。ウ・オについてはいいんじゃないかということになりました。ウの手伝いをするといった意見に対して六か月前に、弟が生まれたばかりの晃は、自分の経験から賛成意見を述べています。「おれ、仕事なんていっぱいあるぞ。それはさ、ばんばらな（おんぶだな）本もよんでもやれるろ。ミルクもつくってやれるろ。それにかわいいぞ。」というのです。この意見はみんなの共感をよびました。

仕事、すなわち自分が弟のためになっているという実感の上になつてすすめられる家事労働は、子ども本来の生きる活力のようなものをやしなうことになると思います。しかもその仕事をする、赤ちゃんがかわいいぞといっているのです。子どもたちの、この話から、まさしの家のかべをとってほしいという願望は、決して、まさしだけのことではなくなつたようです。この授業のおわりには、どの子もほとんど全員が、あかちゃんを生んでもらうことが、まさしもいいし、いや自分もいちばんいいと思ったのです。まさしのいたみと、自分のさみしさ・願望と一致する認識になつて。そして、どの子もどの子も家にかえて弟や妹を生んでほしいとたのんだということです。

お母さん　あかちゃんうんでね　小一女

やす子は　おとこの子がいいといいます。

わたしは女の子がいい。

おとこの子は　きかんぼうだから　女の子がいい、

やす子は　女の子ばかりではつまないから男の子がいいといいます。

あちゃんがほしいから

やすこはじぶんばかりごはんをたべないでおかあさんにやっています。

わたしは おかあさんに かたをもんでやったり 足がいたいというから 足をもんでやります。

この社会科の実践は、家の人たちにも共感をよびまし、親の間でも、話題になりました。実さい、三人目を生んだ級のお母さんが四人もいた年だったのです。

私たちは学校から父母の生産、生活をくわしく見たり、子どもの生活の仕方や学習のなかみの自主編成などを思いっきりやって地域の子を育ててきたような気がします。しかし、どうしても、学校からあけはなれた窓から地域を見るだけでは、とても父母と連帯したり、父母地域の教育力を育てることを援助したり、子どもを、もっと計画的に大がかりに育てるしくみにはなっていないということも気づきました。

□ 学校の力を地域の中で発揮する地域のセンター的役割を果す

(1) 卒業生が暴走族になる

全国で青少年が学校・地域で荒れていた五十五年、大江山地区の子どもたちも暴走していました。市内には十一の暴走グループあったといわれ参加している高校生・有職少年、一部中学生は、三七〇

名ともいわれていました。

私たちの教えた子たちも加わっているという話をききました。学校・公民館・PTA・補習会（町内子ども会）が構成する、大江山青少年育成協議会という半官制の地域の青少年健全育成の団体が、その暴走族とりしまりにたちあがったのです。

暴走族宣言も用意されました。このなかみは、警察と一体になった頂上作戦で、地域からしめだす方法をとろうとしたのです。私たち教師は、敏感に反応し、追放宣言にかわる父母地域の教育力をたしかめる運動に切りかえることを役員会の中で提起しました。理事として参加した教師・事務局をうけ持った教師たちの力で、地域の教育力調査に切りかえました。

地域の教育力調査とは、朝の生活の仕方・子どもの労働について・テレビについて・中高校生の生きがい・農業について。五項目にわたりました。対象は、小・中・高校生千名で、各町内の役員が、各家庭をまわってアンケートをとったのです。いつも学校から調査の紙をもらってくる親が、自らグループを組んでアンケートづくり・集約に足をだしたのです。これをすすめる中で、今まで、知らなかったような父母が、学校や役員会に見えるようになってきましたし、学校から配布される今までの報告とちがい、「あの町内は、よく仕事をする子が多くなる。」とか「中・高校生の朝の生活は、やっぱり新幹線なみだね。」とか、「学校は、テレビや排便のことについてもっと、指導をつよめてほしい。」とかの意見や要望が出て来て、地域の子の生活のくずれは、私たちの生活から生まれているんだから、何とかしなくちゃならないという危機意識も生まれてきたことも事実です。

五十六年度地域民教交流会北海道集会でも大きな教訓を得てきました。それは、宗谷の教育で、教

職員組合が、リードしながら、地域ぐるみの子育て運動を展開しているはなしに感動したのです。地域が一体となって草の根の子育て運動を学びとりながら、私たち的大江山地区も、子育て提言をやり運動化することを、青少年育成協・学校・園・PTAで始めました、

大江山の子よすこやかに伸びよ

—— 子 育 提 言 —— 実 物

子育て提言の内容の実践のひとつに、子育て懇談会があります。五十年以後毎年やっていますが、終わると父母と教師と時には、外部の助言者も交えて総括をします。その一端を述べますと、

(1) 何といっても、地域の学校の先生方が、町内ごとに出て学校内の子どものお話をしてくれる。又、しつけの話では助言をしてくれるのいい。

(2) 商業主義が子どもに様々な影響をもたらしている例も確認できた。例えば、有名ブランド商品が子どもの中にふえてこまる話などです。

(3) 中・高校生の地域における姿に目をくれ、はめるところをみつけはげましていこう。

(4) 子どものおやつについて。ジュース・スナック類が多すぎる。何とか考えていきたい。

(5) 幼・小・中高校の先生が参加してくれるので、問題が多様にみられていい。

(6) 学校と地域の父母が対等に語られている点は子どもを育てる上で大切。非行に対する扱い方、子どもの見方や、部活動が小学校から活発だがそのいい点と悪い点を明らかにしていこう。

(7) 地域・家庭での教育課題を学校でも職員会議にかけてもらおう。

等が確認されています。年々、すこしずつちがいますが、中心となる総括はかわりません。

こういう運動が展開される一方で、地域づくりの観点をもっと入れていくというので、大江山地区一周駅伝・マラソン大会とか、映画（はだしのゲン・ブリキの勲章・それぞれの旅だち等々）とか、講演会（能重真作先生、若林繁太先生をおむかえして）もいろいろくり返されています。

なかなか多勢を集める集会や会議がつづくわけですが、役員を中心にその組織が一ばん苦勞するようです。学校側の事務局が、時には、力を弱めているときは、父母の役員に荷がかかっていきます。このバランスもむずかしいひとつです。

(2) 学校の行事のくみかえと子ども会のセンター

ア 一年生を迎える会から

丸山小学校は三八〇名の十二学級という理想的な児童数です。これらの運動の流れの中で、子どもたちのとらえなおしを学校の中でも同時にすすめています。

まず、児童会の役員（五・六年生）は、地域においては、亀田おやこ劇場のなかまです。様々な集団生活や、すぐれた文化にじかにふれています。さて、何といっても、学校を楽しいものにしていくということ、一年生を迎える会に前年度よりとりかかります。入学してくる一年生を心から歓迎するのは何か考えました。鯉のたきのぼりを全校がしてやることにしたのです。即ち全校が、体ごと一年生を抱いて前へおくるのです。鯉のたきのぼりがおわると、森から森へ、友だちはいいもんだ：の太合唱、全学級による色ちがいの紙ひこうき（メッセージがかいてある）が、体育館中央に円陣を

つくっている一年生にむかって放たれます。一年生はおどろきの声をあげます。体育館をまう十二色の紙ひこうきは、一年生と全校に、子どもの手による集団づくりのイメージが高められています。このあと、集団ゲームと続きます。

イ 全校風あげ遠足で遊びの技と集団づくりを

昭和五十六年より児童会の三大行事を先の一年生を迎える会・十月初旬の全校風あげ遠足・十二月の若竹祭としました。秋のバス遠足も行事をこなすというものでしかなく、子ども一人ひとりの姿が浮んでくるものではありません。そこで、子どもの最も興味ある遊びで、集団づくりをしながら秋の遠足をやれたらと職員は考えていました。約一年間折々に討論をし、ついにこの年より実行にうつすことになりました。風なんかつくったことないという女教師、一年生と六年生といっしょに歩くなんてむちゃだという話、風をつくっても現地であげようとしても風がなくてあげられないかもしれない……いろいろな問題が山積していました。活動の主眼は、①全学年の交流とくにたての交流をさかんにするために、一年一六年をグループにわけ三十人の班を十二つくることにする。②子どもの見えないところ一よさ、ものの見方考え方・連帯の仕方などをていねいに教師はみなおす、③学級の主体性をもたせ学級討論を組織し、代表委員会では活発な意見を出させる、④上学年の子は知恵・知識・技を下の子に伝えていく一下の子は、従ったりいっしょに楽しんだりする、⑤手・体の労働・技を育てる、⑥代表委員である児童会役員にまかせることにせず、実行委員会をつくり、すぐれた技のもち主やかくれたリーダーを堀りおこす。

等にありますが、職員では、次の点を克服する集団づくりをめざそうと確認しました。

- ① 会計を子どもにあずけるか。
- ② 個人個人のおやつはやめて、実行委員会が決めた給程度にできるか。
- ③ めんどくさい、やりたくない……という高学年の子にどう実行委員会は対処するか。
- ④ 子どもが子どもに教えることを徹底させる……以上の点を実行委員会の集団化をつよめ、他を動かすことの出来るリーダーづくりをしていくことにしましたのです。

実行委員会では、やはり先にあげたような問題が出されましたので、きちんと論拠を示したり、相手を説得したりする点が特徴的でした。高学年のあるグループからは、自分たちの六年生は、遠足はいいが、たこはつくる必要があるのかとか、おやつは自由にしてほしい……という意見が出たけど、それを打ちやぶる討論してきたグループが全体をリードすることになりました。

班のワッペン・班アピール・風づくりの原案が何回も何回も各グループごとに討論されました。又、風づくりの講習会をひらいて、グループを指導できる子ども先生を養成しました。当日は、片道六キロの道を異年令グループごとに歩きました。午前中、たこあげ・午後は、全校集団ゲーム（鉄道建設・人間がり）閉会式（集団に寄与したもの・たこの技の表彰）をやりました。

たこづくり 五年 和田 真樹

ぼくは、三・四年のたこづくり実行委員でした。それに、三〇分休みや放課後いっしょうけんめいたこづくりのことを高橋先生からならいました。それから、二日ぐらいいして、たてわり班でたこづく

りを始めました。ぼくは十二班です。たこづくりで苦労したところは、紙の切り方やおそくなる人を、ていねいに教えることでした。おそくなる人やよくして、よその所にいつてしまう人がいて、まとめるのに大変でした。たてわりの遠足の日が来しました。ぼくたちが、いっしょうけんめい作ったたこをあげる日です。天気はよく昼からは風もでて来て、たこをあげるには、ぜっこうの日になりました。賞状はもらえなかったけど、たこは、なかなかよくあがり満足しました。

たてわり遠足で思ったこと

六年 小見久枝

一番心に残ったことは、たこ上げでした。作る前からやる気がなくて、「したくないなあ。」と思っていました。作る時だって、「どうせうまく上がらないんだから……」と半分あきらめていました。そして、当日、たこ上げの時に、高橋先生は「うでがいい人はあがります。」と言われました。私は一度も上げたことはなかったので、「もうだめだ。」とやってもいないのにあきらめていました。最初は上げようと思っていなかったのですが、遊び半分にやり方も聞かずにいました、実際、さっぱりあがりません。「おもしろくないからやめた。」といって、たこの箱にもどしてしまいました。少したってから友だちのたこが、空に小さく上がっているのを見ると何だか「私も……」と思って、もう一度やってみることにしました。そしたら、いつの間にか上がっています。糸をどんどのばしていったら、のびた分だけあがります。不思議で、とってもはればれた気持ちになりました。その時はじめて「たこあげのおもしろさ」がわかりました。

そして、私は、閉会式で賞状までもらいました。今でも「気まぐれじゃないかなあ。」とっていてい

ます。そして、もう一度、同じたこを作ってあげてみたいです。今年の小学校最後の遠足は、思いがけないことがあって、一生わすれないと思います。なにしろ、たこがあがったんだから……。

子どもたちに伝える遊びの技は、なかなか計算するように見えません。久枝さんのような子をいっぱいにつくことも、今回の行事のねらいでもありました。又、集団ゲームについても、何が何でも班が団結しなくては勝てないものを取りあげました。鉄道建設ゲームについては、十二の班が「ヨイ・ドン」でどんどんいろいろなものをつなげていき、一ばん長くした班を勝ちとします。五・六年生の中には、みんなのあとから、つないだものが切れてはなれていないか点検していく子がいます。それから、一・二・三年生くらいの子では、パンツ一つになつて着ているものをみんなつなげている子もいます。先生方は、全体をみて、すぐれた面をチェックしていきます。ゲームがおわると司会は、「五年の〇〇君は、いちばん最後から歩いていき、切れていないか点検していったぞ、だから〇〇君のチームは勝ったのだ。集団が高まるためには、必ず冷静な〇〇君のようなリーダーがいるんだ。来年はりっぱな児童会の役員に立候補できるぞ。」といってみんなの前ではめます、プライドに満ちた顔で拍手うけました。「三年の△△君、パンツ一ちよだね（全校大笑い）そう、自分たちの班をよくするためには、はだかになることだって時には大切だよ。△△君に拍手してあげよう。」という、その子はもう興奮しています。

この行事の実行委員会のまとめは――

① たこがこんなにもしろいとは知らなかった。（しらけをのりこえた子の声が多い）

② あがらない風は、教師の指導、上学年の指導の甘さが指摘された。

③ たこの絵に「聖子命」「特攻」「夜路死苦」などが目立ち、その班のとりくみの甘さを追求した。

④ 来年も風大会を含んだ遠足をつづけよう。今からタコクラブをつくり技術を蓄積しよう。まさに、たこはたこであって、たこじゃないところまで高めよう。

⑤ 全校集団づくりの課題を明らかにしよう。だめなのは六年生がいるからじゃない、要求のだし方・原案のつくり方・総会へのとりくみ・リーダーの指導を、具体的にやっていくこと。

学校が輝き子ども達の笑いとみがきあいのゆきかうとりくみが、必要です。私たちの学校は、新潟市の中でも数少ない学校閥の先生グループが結束していたり、管理職のことなかれ主義も見える学校ですが、これらの行事で子どもへの感動とそれを生みだした教師の汗がお互いにみえてくると、一致したとりくみ一致した子ども観が積み重ねられます。

ウ、父母と共に教育をつくりあげる

補導部・生徒指導部は、学校の機関として、地域の子ども会役員を集めることが出来ます、毎月ひらかれる町内子ども会連絡会を、学校が主催してやっています。そこでは、学校側の教師からみた子どものすぐれた点、弱点をどんどん親に伝えます。リーダーとしてすぐれた子を親に伝えるのですから、親たちは、その子を暖かく見つめ、地域で、子ども会のリーダーとしてはげましていきます。又、長期の休みには、子ども学校（恵那の豆学校にあたるもの）を開くことを提案しつづけ実践しています。

次の表は、ある子ども会の一泊二日の地域の会館を使つての計画です、ほとんど子どもだけの手でやれます、何年もやっていると同学年の子は、上学年のやつたように大体やっています。子ども学校に書いた習字を町内の神社に全員分はります。これをみた地域の大人・老人たちが、「〇〇の家の子の字のはねがいい。」「△△の子の字はうまい。」と、いろいろな会合で声をだしてくれて、それが、学校にも伝わってきます。

町内の子ども学校

エ、PTAも教育運動を

宮原誠一先生がかつて、「PTAの四番目の仕事は、教育運動をすること」といいました。

単にPTAが、教養を高める・親睦を深める・学校の施設づくりに協力をするにとどまらず、子どもと父母を高めていく運動にも目をむけていくことが大切です。

その一つは、地域めぐりです、夏休み等、時間の余裕のあるとき、地域の様々なものを見たり、参加したりしていくことです、ほんとうにいろいろなものにふれました。ある時菊づくりと苺づくりの状態を見聞しました。地域の古老が、「戦前はほんとうに大江山の菊はうれました。出征した私たちの子どもが、死ぬと菊はうれました。菊がうれて、家がたつほどした。」という話。逆に「苺は戦前は、ぜいたく品でめったにたべられませんでした。ほんとうに、たべたくても、ぜいたくするな、と、まわりからいわれたものでした。」……と、新潟市大江山地区の苺づくりは、全国でも有名な産

地。とても、子どもも親もこれらの話で考えさせられました。又、地域の土器の発掘や集落開発の碑の拓本づくり、出征兵士の墓しらべなどもやりました。六年生の歴史の学習も教師と親と子ですみます。

P T Aの活動のいろいろなもの一つに、四者こんだん会というのがあります。幼・中・高の先生を招いて、子どもの発達・生活リズム・文化環境の問題など話しあいます。

「遊び場をどうする」「テレビをどう見せる」「学力を高める素地づくり」などテーマにしたこともありました。小学校の現場で、たての系列で問題が見えてとても役だったようです。

こういう中で、地域の父母・大人たちが、神楽のほりおこしと保存に力をだしたり、冬の子ども行事である、さいの神まつり（火まつり）を復活もしました。しかし、さいの神まつりが、大成功し、子どもはするめを火でやいてたべ、大人はお神酒をいただいているとき、いつのまにやら「教育勅語」をきれいに印刷した（神社庁の名入り）紙がくばられました。

草の根の保守の動きも、どんどん見えてきます。学校をめぐる地域は、すこしずつ変形させようという一方の力が動いていることも事実です。教職員の学校から子どもたちを見なおし、子育てを共に運動としていこうというはげますが、今日ほど大切なときは、ないと思うのです。

□ まとめにかえて

昨年九月に県議会では「日の丸」「君が代」の扱いを強行採決しました。地域に根ざした運動なし

にこのことはね返せません。

さらに、行革による社会教育への働きかけ——自然教室・ボランティア——なども着々と行われています。さらに、臨教審の具体的な攻めきき、つよまるばかりです。私たちは、地域に根ざし、子どもを深くみつめなおし、父母と共に教育創造を一步一步すすめる以外に未来はないと思っています。

大江山の子よ すこやかに伸びよ

家庭・地域への



大江山は、父母・祖父母・近所諸君の協力によりよい村で、子どもが健康に育つていきます。しかし、子どもが成長のしほりの間は、一歩ずつ進んでいく必要があります。そして、成長のしほりに適応・順応・学習するための努力が必要であります。いまだ成長のしほりに、この世にも、どこか遠くにも、アフリカの大地、まじりこすこととす。子どもたちをすこやかに育てるために、やばくてもかまいません。こととす。はじめる。

一、いびつとじたりスムおる生活をじつかり進めつけおせまらう。

1. 生活・学習・遊び・健康・生活
2. 生活・健康・遊びがききとリズムある生活をせよう。
3. 生活・健康・遊びがききとリズムある生活をせよう。
4. 生活・健康・遊びがききとリズムある生活をせよう。

二、いびつとじたりスムおる生活をじつかり進めつけおせまらう。

1. 生活・学習・遊び・健康・生活
2. 生活・健康・遊びがききとリズムある生活をせよう。
3. いびつとじたりスムおる生活をせよう。
4. 生活・健康・遊びがききとリズムある生活をせよう。

三、いびつとじたりスムおる生活をじつかり進めつけおせまらう。

1. 生活・学習・遊び・健康・生活
2. 生活・健康・遊びがききとリズムある生活をせよう。
3. 生活・健康・遊びがききとリズムある生活をせよう。
4. 生活・健康・遊びがききとリズムある生活をせよう。

四、いびつとじたりスムおる生活をじつかり進めつけおせまらう。

1. 生活・学習・遊び・健康・生活
2. 生活・健康・遊びがききとリズムある生活をせよう。
3. 生活・健康・遊びがききとリズムある生活をせよう。
4. 生活・健康・遊びがききとリズムある生活をせよう。



昭和六十年度作

大江山地区青少年育成協議会

丸山小学校 P T A ・ 大淵小学校 P T A ・ 大江山中学校 P T A
 北山協賛会・丸山協賛会・名阿古協賛会・西山協賛会・松山協賛会・横山協賛会・鹿角協賛会・松山協賛会・大淵協賛会・中大淵協賛会・下大淵協賛会・西大淵協賛会・江口協賛会